

絨毛腺管状乳頭腺癌の一症例

西川 武, 田辺 雅世, 枘尾 和江, 三谷 弘美, 伊藤 寛子, 増谷 喬之
(奈良県立医科大学附属病院)

はじめに>

絨毛腺管状乳頭腺癌(以下VPA)は子宮頸部癌において発生頻度の低い腫瘍であるが、通常の頸癌より年齢層が低く、また、予後がはるかに良い。しかしその細胞像は異型性に乏しくその細胞診断は容易ではない。今回我々は、VPAの1症例を経験したので報告する。

症例>

50歳女性、4妊3産。平成14年5月近医にて頸部異常細胞指摘され、同年10月頸癌が認められたため、当院受診。頸部スミアにてadenocarcinoma 頸部組織診にてVPAと診断され、動注2コース後、腹式単純子宮全摘術および両側付属器摘出術が施行された。現在経過観察中ではあるが再発を認めていない。

細胞像>

乳頭状、絨毛状あるいはシート状の集塊を認めた。集塊では配列不整を認めた。類円～楕円核が内側に位置し、

N/C比大、クロマチン細～顆粒状に増量を認めた。また、小集塊状や孤立散在性にも同様の細胞を認めた。乳頭状或いは絨毛状に出現した集塊はVPAの典型的な像と考えられた。

子宮頸部 punch biopsy>

やや villous 状に増生する異型腺管がみられ、粘液産生はみられず、頸部原発のVPAと診断された。

連絡先 TEL 0744-22-3051 (内線 4302)